

179(430)R.13(E)
98(94)

この地にも名あり

犀ヶ崖

(浜松市中区)

JR浜松駅から北西に二・五ほど、国道257号沿いを北上すると、大きな交差点の角に真新しい建物が見える。犀ヶ崖資料館。深さ十二メートルある犀ヶ崖という崖の近くに建てられている。「犀」という字が気になる。動物のサイのことだろうか。まさか、この辺りに生息していたわけではあるまい。果たしてその理由も、しっかり館内のパネルで説明されていた。

犀は、金沢市の犀川、京都市の西院と同じく、都市の西の境を意味します。(中略)鎌倉時代から戦国時代にかけて、現在の馬込川(当時は大瀬川の本流)の西岸に引馬と呼ばれる宿場が発達してにぎわいました。この宿馬から見て西、池川の谷をのぼった斜面が宿場の人びとの墓地となっていた



と思われます。ここより西は荒涼とした台地で、まさに犀ヶ崖はこの世とあの世の境と考えられたのです。

浜松観光ボランティアガイドの会の中村晃さん(仮名)は地名の由来について「『犀』という生き物が出てきたためにできた谷という話もある。昔の人たちは動物のサイなんて知らないでしょうから、空想上の生



「三方原の戦い」や「遠州大念仏」の資料が並ぶ犀ヶ崖資料館で、説明をする中村晃さん(仮名)。

のがこの場所で、地形に暗かった武田軍は人馬もろとも崖下に落ちたという。崖に落ちた戦死者のたたりを鎮めるために、家康が念仏を推奨したことから、「遠州大念仏」が生まれた。

資料館では、三方原合戦について、資料や年表を通して解説している。中でも目を引くのは、浜松市出身のジオラマ作家山田卓司さんが作った三方原合戦の出撃や敗走などを描いたジオラマだ。数百体の兵士の人形たちが、両軍入り乱れる力作もあり、白みがかった大地から決戦当時、浜松には珍しく雪が降っていたことが分かる。

中村さんは「身近にある貴重な歴史の現場。より多くの人に犀ヶ崖について知ってほしい」と話す。涼みがてら、若き日の家康に思いをはせてみるのはいかがだろうか。

文・鎌倉優太
写真・川原賢一

三方原合戦 家康が一矢